

海外出張の思い出 (13) (ナイジェリア編①)

高島敬明

★ナイジェリア KADUNA リファイナリー器機輸送、据付作業

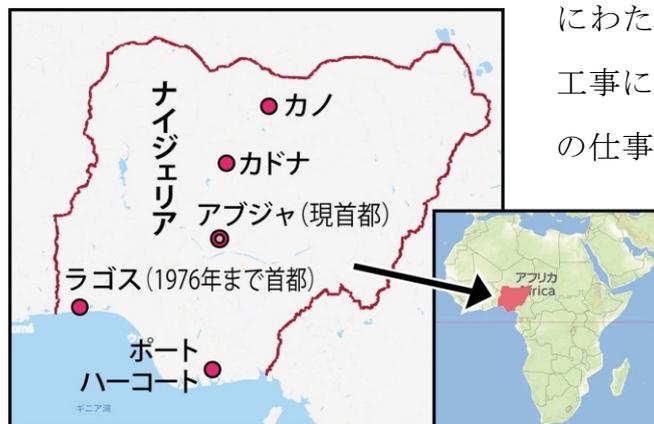
前号までは、旧ソ連のノボロシースクでの海外出張記でした。今号からは、ナイジェリアでの海外工事の思い出を書き綴っていきたいと思います。ナイジェリアという国は読者の皆さんの殆どは詳しくご存知ないのではなからうか、と思います。ある方は、2014年に発生したイスラム過激派組織「ボコハラム」が女子生徒 276 人を拉致した事件のイメージかも知れません。またある人はサハラ砂漠とか、奴隷海岸を思い起こされるかもしれません。この海外出張記は 1979 年—つまり今からちょうど 40 年前のナイジェリアの様子を書いたものです。

まず現在のナイジェリアがどのような国なのかを見ておきましょう。ナイジェリアは赤道のすぐ北に位置し、面積は 92 万 4 千平方キロと日本の約 2.4 倍の広さです。人口は、1 億 9 千万人とアフリカ最大です。イギリス連邦加盟国で、2014 年には南アフリカを抜いてアフリカ最大の経済大国となりました。1960 年に独立、首都は大西洋（ギニア湾）に面した都市のラゴスとなりましたが、1976 年に国の中心地であるアブジ

ャに遷都することを決定し、1991 年に正式に首都となりました。アブジャの市街地の中心部のマスタープランは、建築家の丹下健三氏によるものなのです。国名のナイジェリアは、同国を流れるニジェール川から採用されたものです。

1979 年（昭和 54 年）3 月に、1 年にわたる黒海での仕事を終え帰国しやれやれと思っていた矢先、アフリカのナイジェリア国のカドナリファイナリーの建設工事に従事する話が持ち上がりました。この仕事は当時在籍していた名古屋支店で、主にラゴスから 1 千キロ奥のカドナまで、資機材の水切りから現場までの輸送の仕事、及び現場で使用するすべてのクレーン重機を日本から運び現場に供給することでした。現地での工場建設の据付工事は当社・鶴見支店が担当していました。日本からの輸送から機器据え付けまで、当社が一貫受注した海外工事としては大規模なもので、すでに実施していた重量物運搬のための国道の補強工事などを含め責任者は 3 年半の長期

にわたって家族とも離れて現場工事に従事していました。現場の仕事はすでに大物の機器の据え付けはあらかた終了し、最後の追い込みに入っているところでした。輸送作業は通常の





道路わきの蟻塚。日本の蟻より少し大きめで、毒を持ったものもいるそうです。(1980年5月)

機器の輸送と建設作業で使用した重機類の撤収という大変困難な作業が、通信も非常に不便な中、同時に進行していました。会社としても出張が非常に長くなった責任者を、これからの激務を考えると交代させねばならなくなったのです。

その後任として私に話が回って来たわけですが、まだソ連から帰って4か月経ったばかりでしたから、「家内と相談して返答いたしません」と答えました。家に帰って妻に話しますと、妻は普通の表情で「貴方は行きたいんでしょう、行ったら！」と一言。私はアフリカは二度とチャンスがないかもしれないこと、前任が直属の上司で名古屋に赴任以来大変お世話になってきたU次長であることなど懸命に話して了解を取り付けました。

ただ妻が子供に、「お父さん又外国に行くんだよ」と、小学校に入ったばかりの一人娘に話したとき大泣きをされました。「いやだ！日曜日社宅のお父さん達は自動車で遊びに連れてってくれるのよ！」一番きつい言葉でした。今回の交代劇で一番の問題であった、前任者

の体調のこともあり慌ただしく7月の出発が決まりました。

ナイジェリアの続きです。仕事の現場であるカドナを含む北部地方は、サハラ砂漠に連なるやせた土地で、宗教的にはナイジェリアの中では比較的回教の影響が強いところでした。民族的にはイスラム教徒の「ハウサ人」です。西部はイスラム教、キリスト教混合の「ヨルバ人」、それに東部・南部のキリスト教主体の「イボ族」が大半を占め3大民族が国を形成しています。イボ族は、石油を生産する地域であることからイギリスの植民地時代から裕福で、教育程度も高く商売も上手で「黒いユダヤ人」と言われているそうです。

東部ビアフラ州のイボ族は、独立6年後の1967年に石油の利権を持って独立を宣言し、戦争を起こしました。ところが形勢が悪くなりおまけに双方に外国も参入して、フランス、イギリス、ソ連の三つ巴の戦いが続き周りを包囲された凄惨を極める戦いが続いたのです。結局戦いはハウサ人にイボ族が負けて決着した訳です。150万人の死者が出たと言われていますが、ハウサ人はイボ族に対し制裁を加えることなく融和の道を選択しました。

その後イタリアの映画監督「ヤコペッティ」による「世界残酷物語」が上映されましたが、その中の一つの話として「ビアフラの戦い」が出てきます。テレビのコマーシャルに出てくるような大きく枝が広がった孔雀の羽のようなきれいな大樹の根元に、太陽の逆光を受け黒々とした野球のグローブのような手が山

になっている画像がありました。大樹に手を押し付けられてナタで切断された大勢の人の手だったのです。この残酷な現実が1970年に終わったわけですが、私が赴任する10年弱前のことだったのです。

ソ連のゴルバチョフのペレストロイカが1989年ですから世界は激動の時代であったわけです。また、当時から騒がれ始めたサルから人間に感染したと言われている「エイズ」は、ラゴスから少し北の密林の中から世界中に広がったと言われています。

ナイジェリア西部の海岸から今日のペナン、トーゴあたりは、近世「奴隷海岸」と呼ばれ、ここから主として働き盛りの男達がアメリカや西欧諸国に売られていった悲しい過去があります。その数1千万人とも2千万人とも言われるそうですが、これがアフリカの経済的、文化的損失に繋がり現在までの貧困の原因の一つとされています。

さて前述の通り慌ただしく準備が始まりました。工事の現状までの説明を受け、大手エンジニアリング会社のC化工建設との打ち合わせが終わり、出発することになりました。私に替わって妻は黙って持ち物の準備を進めてくれました。

心の準備はできているようでしたが、ある土曜日の朝社宅の周りの家々から次々に家族を乗せた自動車が出て行きます。遠くから（北海道）嫁いできた妻は、親も親戚もなく孤独の中で、「この瞬間が一番怖いのよ」と言いました。私がいないと子供と二人じっとこの時

間が過ぎるのをカーテンも開けないで過ごすのだそうです。私はこのことを聞きもう家族は犠牲にはできない、今回で海外は終りにしようと思いました。

成田空港を離陸した飛行機は、アラスカのアンカレッジ、次にオランダ・アムステルダムスキポール空港、それからナイジェリア・ラゴス空港と約36時間もの長い旅でした。緊急の現場監督のピンチヒッターのようなものですから、気楽な一人旅でしたが、それもスキポール空港までのことでした。ここまでは機内は日本人が多く日本語も飛び交っていましたが、英語があまり得意ではない私はここで乗り換えた時から試練が待っていました。

次号はそのあたりから書いていく予定です。

（続く）